

〔特別展によせて 2〕

中国初期仏教彫刻史より(2)

北魏時代の仏像—五胡十六国仏の踏襲と発展の面から—

五胡十六国の中で燕、秦、涼を立てたのは、部族連合体を成していた鮮卑族であり、彼らは早くから流亡中国人を受け入れて漢文明をとり入れ、華北に侵入したのでした。その内、拓跋氏が華北全土を統一して、北魏を立て北朝の基を開いたのが太延5年(439)です。

その地は仏教普及の伝統のある河北(黄河の北方)、山西地方を中心とし、西は敦煌にまで及んでいます。この北魏は前代に引き続いて仏教を奨励し、中国最初の仏教隆盛期を迎えました。

わが国に残る、太平真君4年(443)の銘を持つ金銅仏立像(挿図1)は、金銅仏では北魏時代の古い銘文を有する仏像です。しかし、これを見ると、五胡十六国仏と同じ通肩の衣裳ですが、それはずっと自然的に衣褶を表現し、肩における二股状の襷や頭髪はガンダーラの的ですが、大衣の端を左肩の外に張り出させるのは北涼の偏袒右肩像に見られ、また、両手を五胡系仏像のように禪定印にするか、片手で衣を取るかではなく、両外に向けて広がりを感じさせ、更に、顔が丸く柔和な表情を見せるなど、五胡系仏像とは異なる要素が多く、五胡系仏像を踏襲したものとは見えません。その点は、五胡の坐像とは異なり、また、五

胡の立像と比べてみても、違いは明かです。つまり、本像を五胡時代の如来立像と見られている京都国立博物館の金銅如来立像と比較すると、京博像は大きく強い目であり、衣端は左肩の後ろに垂下しており、左手は五胡系坐像に見られるように衣を取っている様子で、口髭を蓄えており、頭髪も毛描きは縦線で行なわれていて、波形ではない点など、太平真君像とは多くの点で違いがあります。

また、五胡系仏像のガンダーラ的な要素としてみられた口髭や、衣褶の自然的表現、禪定相、左手で衣を取るなどといった点とは異なるガンダーラ的な要素(波形の頭髪、二股の衣褶)を太平真君像は持っており、ここに五胡系仏像の西方的要素と、北魏初期の西方的要素とは合致していないのを見ます。他の点でも五胡系仏像の延長上では素直に解釈できません。五胡時代とは異なる新時代の新様式とも言える要素をむしろみるわけです。

これに対して、五胡系仏像の踏襲とみられる作品が南朝の方に早く現れている—現在残るものから言えば—ことに注意が払われます。それは劉宋元嘉14年(437)銘を台座に刻む如来像(挿図2)です。仏のみを包む立派な舟形火焰光背



挿図5 太和2年銘 金銅如来坐像



挿図6 太和6年銘 金銅如来坐像

を備えているところは五胡十六国仏が台座の両脇から上に伸びて途中でくびれをもった舟形光背であり、しかもその上方が突出しそこに支柱を設けて傘を取り付け、また光背にも脇侍供養者と、西方的な飛天が伴っていたのとは異なります。しかし、如来自体は髪に毛筋を描き、衣は通肩でU字形の衣褶を表わし、手は禪定印に結んでいます。また、台座は、獅子はいず、五胡系仏像にも見えた段々を成すいわゆる框座と四脚座が合成されています。これを考えますと、本像では光背と、台座の一部に中国化とも言うべき新様式が現れていますが、如来自体や四脚座の形式は五胡十六国仏の形体を踏襲していると言えます。注目すべきは、本像は同時に太平真君像と同じ北涼由来の左肩脇の衣端を表現している点です。

南朝の五胡風作例としては、もう一体、アメリカのフリヤ美術館にある元嘉28年(451)の如来像(挿図3)があります。大きな宝髻を持つ頭部は前像よりも五胡十六国

仏に近く、U字形衣褶の通肩をまとい、禪定印を結ぶ。光背は全体に火焰を刻み、3体の同じく五胡風の化仏を浮彫していています。台座はほぼ前像と同じですが、上框に模様をつけています。実は、北朝(北魏)では、先述の太平真君4年の3年後(446)に時の太武帝が仏教弾圧を開始し、それが興安元年(452)まで続きます。従って、太平真君4年像は、仏教弾圧直前の貴重な作例であり、また、南朝の劉宋元嘉14年像は、北魏の統一(439)直前の作品で、南朝にも五胡の作風が及びながら、既に新しい南朝様とも言う形式が生まれていたと言えます。中国の初期仏教彫刻史においては、隋の統一までは、仏教の形式発展の源は北朝か南朝かという大問題があります。その意味から、南朝には、北朝よりも先に、挿図2や挿図3のような後の北朝をも含めた中国全体の仏像の基本となる形式が存在したということは重要になります。しかも南朝では北朝の仏教弾圧中にも挿図3(元嘉28年<451>)は、

挿図1 太平真君4年銘 金銅如来立像



挿図2 元嘉14年銘 金銅如来坐像



挿図3 元嘉28年銘 金銅如来坐像



挿図4 和平5年銘 金銅如来坐像





挿図7 景明2年銘 金銅如来坐像



挿図8 太和元年銘 金銅如来坐像

北朝の復仏の一年前)のような、元嘉14年像を更に発展させた仏像が作られていたということになります。

これに比べ、北魏では、五胡十六国仏を踏襲した金銅仏は、復仏後の和平5年(464)に初めて見られるとされてきました(挿図4)。(1988年に長崎県対馬で発見の興安2年(453)金銅如来坐像も類似の形式で、10年先立つものとして注目される。)和平5年像を見ますと、頭部に毛筋を彫り、着衣、禪定印も五胡風です。台座も前二像と同形ですが、四脚座に唐草模様を施して、挿図2像で行なっている台座内縁の削り形の代用としています。光背は新たに頭光と身光部を明確な隆起線で区画し、頭光の上に傘形を表わしている点が前像とは大きく異なります。

次に太和2年(476)銘の像(挿図5)が挙げられます。頭部が大きく、その毛筋を背面では首の辺りまで縦に太い線刻で行っており、台座の上框背面に光背を取り付けていた長い柄が突出しています。小像(高13.1cm)ながら、光背を前像のように一铸とせず、別鑄している丁寧な作品です。台座にも削り形を加えています。太和6年(482)銘像(挿図6)はフリア美術館像(挿図3)に類似し、身光部に明確な区画を設ける点は太和5年像(挿図4)にも通じます。

また、これに近い形式が太和13年(489)像ですが、四脚座は高くなり、そこに唐草模様を横帯状に彫っているのは太和期の仏像の流行です。最後に景明2年(501)銘

の像(挿図7)があります。この像の特徴は着衣の衣褶が五胡十六国の西方的な作品に見られたのと同様な片流れに表わされている点、光背の頂上が極めて突出し、周縁には縁取りを設けて、そこに化仏を縦に並べている点です。四脚座は前像と同じように高くなっています。

以上のように、北魏の仏像に前代の五胡十六国仏(美のたよりNo.99参照)を踏襲し、それを発展させたものがあり、南朝にもそれがあって、北朝のものと南朝のものに互に通ずる諸点があることが分かります。

更に、北魏前期に一つの画期をもたらした太和年間(477~499)の仏像の中に、五胡十六国仏のこれまで以上の発展的要素が華々しく展開しているのを見ます。それは台座に太和元年(477)の銘を刻む如来坐像(挿図8)です。如来の頭部や偏袒右肩の衣にはむしろ西方的な形式が入っていますが、一方の手に衣をつかむ手印は五胡十六国仏の像にもあった懐かしい形です。四脚座はまだ低く、そこには和平5年像(挿図4)と同じような唐草状の模様が四脚の内縁を飾っています。そして何よりもここに供養者が位置を変えて四脚の両側ではありますが、戻って来ました。また、あの懐かしい一對の獅子も四脚座の上に立体的な姿となって戻って来ました。大きく立ち昇る火焰の有様は、像全体を覆う金色の怪しいまでの美しさをひととき高揚させています。

(村田靖子)